

どんながん検診を受けるか？

Q がん検診と一口でいってもいろんなタイプのもがありますね。専門家がいわれるように対策型といわれるもの、任意型といわれるものに2別されるのでしょうか？

対策型のなかでも、市町村で行うもの、職域で行うものがあります。また任意型といっても医療機関で受けることもあるでしょうし、保健センターなどで受けることもあると思います。

がん検診は以上のいろんなタイプのどこで受けるのが一番よろしいか、それぞれの長短があると思いますが、凡そのことをご教示いただけませんか？

A 現時点で、まず受けるべきは市町村におけるがん検診です。より高額な検診を受ける必要はありません。その理由を説明します。

がん検診の利益と不利益

がん検診の利益は、がん死亡のリスク（がん死亡率）が減ることです。一方で、がん検診には、不利益もあります。代表的な不利益には、①放射線被ばくや事故、②がんがあるにもかかわらず異常なしと判定される（偽陰性）、③死に至らないようながんの発す。自らできるがんの予防法として、正しい生活見（過剰診断）、④がんでないにもかかわらず「要精検」と判定されたことによる精神的苦痛（偽陽性）などがあります。

厚生労働省では死亡率減少効果が確かなものとして、肺・大腸・胃・子宮頸・乳房の5つのがん検診を推奨し、検診方法・対象年齢・検診間隔を定めています（表1）。若年からの受診や短い間隔での受診は、不利益が利益を上回る可能性があり、お勧めしません。

がん検診の形態

がん検診には、市町村が行う対策型検診、職域におけるがん検診、個人で受ける任意型検診があります。この中で法律に基づいて行われるのは対策型検診のみで、5つの検診が十分な精度管理の元に行われ、その結果が厚生労働省に報告されま

表1 厚生労働省が推奨しているがん検診

	検診方法	対象年齢, 検診間隔
肺がん	胸部X線検査 重喫煙者(喫煙本数×年数≥600)では 喀痰細胞診を追加	40歳以上, 1年に1回
大腸がん	便潜血検査	40歳以上, 1年に1回
子宮頸がん	子宮頸部擦過細胞診	20歳以上, 2年に1回
乳がん	マンモグラフィ単独	40歳以上, 2年に1回
胃がん	胃X線検査 または 胃内視鏡検査	50歳以上, 2年に1回 ※X線検査は40歳以上, 毎年可

す。一方、職域におけるがん検診には法律の定めがないため、職域でがん検診を受けられない人がいることに加え、検診の方法や対象年齢も様々です。また任意型検診には決まりが一切ありません（表2）。



市町村におけるがん検診は自己負担金が安いため、レベルが低いと思われがちですが、実は、職域におけるがん検診や任意型検診以上に効果が確かです。安心して受けて下さい。

本来、地域・職域を問わずすべての人に正しい検診を受ける権利があります。職域でがん検診を受けられない人も市町村のがん検診を受けられますし、将来的には、すべての職域において市町村と同様のがん検診を行うよう、定められると思います。

がん検診を受ける際の注意点

「要精検」の通知が届いたら、必ず精密検査を受けてください。また自覚症状がある場合あるいはがん検診受診後に自覚症状が出現した場合には、医療機関での検査が必要です。がんで命を落とさないため、是非、がん検診を正しく受けて下さい。

((公財) 福井県健康管理協会副理事長/

がん検診事業部長 松田 一夫)

表2 対策型検診, 職域におけるがん検診, 任意型検診の違い

	対策型検診 (自治体におけるがん検診)	職域における がん検診	任意型検診 (人間ドック)
目的	対象集団のがん死亡率を下げる	従業員の健康管理	個人のがん死亡率を下げる
法的根拠と報告義務	健康増進法に規定。 地域保健・健康増進事業報告	法的根拠なし 報告義務なし	法的根拠なし 報告義務なし
検診対象者	特定された地域住民	従業員	特定されない
検診方法と対象年齢	有効性の確かな方法, 対象年齢が指針で定められる	事業所や健保組合の意向	規定がない
利益・不利益 感度・特異度	利益>不利益が絶対条件 とりわけ特異度(がんでない人を 要精検としない)を重視	利益>不利益	とりわけ感度 (小さながんも見逃さない)を重視